

2026年7月19日（日）主日朝礼拝説教

『本当の幸せ』 井上隆晶牧師

イザヤ書 57 章 15～19 節、マタイによる福音書 5 章 1～12 節

①【神によって教えられる幸い】

1 節「イエスはこの群集を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄って来た。そこで、イエスは口を開き、教えられた。」この箇所は山で教えられたので「山上の説教」と言われています。ユダヤ教では、教師が腰を下ろすと、弟子たちがその周りを囲んで座り、教えを聞くという習慣がありました。ここでもイエス様は同じようにして語ります。これは教会の姿を現しています。教会はキリストを中心にして集まる場所であり、キリストから学ぶ場所です。なぜ「イエスは口を開き、教えられた。」とわざわざ書かれているのでしょうか。詩編に「神よ、わたしの若い時から、あなた御自身が常に教えてくださるので、今に至るまでわたしは驚くべき御業を語り伝えて来ました。」（詩編 71:17）とあります。私たちの聞く教えは神から出た教えであり、神自らが人に語られたものです。

②【九つの幸い】ここから九つの幸いが語られますが、この世の幸いとは違います。これは神の国に生きようとする信者の幸いについて語っています。

3 節「心の貧しい人々は、幸いである。天の国はその人たちのものである。」「心」と訳されていますが、原文は「霊」です。霊が貧しい人というのは、この世の物では満たされない人のことです。そのような人は神の国を求めるようになるのです。私たちの魂というのは、神によらなければ満たされることはありません。

4 節「悲しむ人々は、幸いである。その人たちは慰められる。」これはこの世の悲しみではなく、自分の罪に悲しむ人、人を愛せない者であることを悲しむ人は幸いであるという意味です。そのような人は神から慰められるのです。

5 節「柔和な人々は、幸いである。その人たちは地を受け継ぐ。」柔和とはやさしく、穏やかという意味であって、自分の怒りを抑えられることです。「モーセはその人となり、柔和な事、地上のすべての人にまさっていた。」（民数記 12:3）とあります。またキリストほど柔和な方はいません。「私は柔和で謙遜な者だから、私の轡を負い、私に学びなさい。」（マタイ 11:29）「神は憐れみ深く、罪を贖われる。彼らを滅ぼすことなく、繰り返し怒りを静め、憤りを尽くされることはなかった。」（詩編 78:37～39）柔和とは神の性質です。神は怒るのに遅い方です。すぐに怒る人は、神のイメージから遠く離れています。柔和な人は天と地を受け継ぎます。

6 節「義に飢え渴く人々は、幸いである。その人たちは満たされる。」義とはキリストのことです。人間には義はありません。本当に「義に飢え渴く人」、つまり正しく生きることを求める人は、キリストの言葉と、キリストの生き方の中に義を

見つけることでしょう。そしてイエス様だったらこんな時に、どうされるだろうかをいつも考え、キリストに倣う生き方をするのです。食べ物で肉体の飢え渴きを満たしてくれるように、神の御心を行う人は、その魂が満たされるでしょう。

7 節「**憐れみ深い人々は、幸いである。その人たちは憐れみを受ける。**」憐れみは神の性質の一つであり、隣人を憐れむ人は、神に似て来ます。憐れみは肉体的憐れみと、霊的な憐れみの二種類があります。肉体的憐れみとは、飢える者に食べさせ、渴く者に飲ませ、裸の者に衣服を与え、牢獄に居る者を訪問し、病人を見舞い、旅人に宿を貸し、貧しい者を助けることです。霊的な憐れみとは、罪人に柔和な心で接し、その人の良い所を見ようとし、その人の罪を赦し、その人の可能性を信じ、その人もキリストに愛されている人として受け入れることです。

- ・「人に憐れみをかけない者には、憐れみのない裁きが下されます。憐れみは裁きに打ち勝つのです。」(ヤコブ 2 : 13)
- ・「私が求めるのは憐れみであって、いけにえではない。」(マタイ 9 : 13)

あなたが隣人を憐れむなら、神は地上にあっても、天国においてもあなたを憐れんでくださるでしょう。

8 節「**心の清い人々は、幸いである。その人たちは神を見る。**」世の中で清いお方とは神だけです。だから私たちの心を清くするためには、神のもので心を満たすことです。「**二心の者どもよ、心を清くせよ。**」(ヤコブ 4 : 8) という言葉から分かるのは神にも頼り、この世にも頼るという二股をかける人は、心が清くないということです。人が神のみを仰ぐとき、その人の心は清いのです。そのような人は神を見ることができるようのです。私たちはイエス様の中に神を見たのです。

9 節「**平和を実現する人々は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる。**」平和はどの人でも望んでいますが、実際にそれを作るのが難しいのは自分が損をしたくないからです。ラジオ番組「心のともしび」のキャッチフレーズは「**暗いと文句をいう前に、自分で明かりをつけましょう**」です。平和を実現するとはこのようなことなのです。平和のモデルとはキリストです。キリストは神と人を和解させるために来られたからです。

10～11 節「**義のために迫害される人々は、幸いである。天の国はその人たちのものである。わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。**」義とは神でありキリストですから、キリストのために迫害される人たちは幸いという意味になります。神の教えや真理のために迫害されることも入ります。そのような人は神の国に入るでしょう。

この 9 つの幸いは、この世では損をする生き方だと思います。この世で満たされず、人を憐れんで赦し、怒らず、こちらが負ける生き方です。でもこれが神の子たちの生き方、天国の民の生き方だと言うのです。

③【キリストを知った喜びを忘れないように生きよう】

藤尾正人という牧師さんがこんなことを書いていました。

●「幕末、開国と攘夷をめぐって世情そうぜんとわきたつ1859年5月、日本最初のプロテスタント宣教師リギンス（聖公会）はキリシタン禁制下の日本の土をふんだ。そして百年、今や福音は日本の風土に根をはり、樹と成長し、年輪も百年を数えるようになった。しかし、この百年、いかに多くの日本人が、キリストを信じたと告白しながら、信仰をやぶれ草履のように捨て去ったことか。文学者を例にとれば、島崎藤村、国木田独步、正宗白鳥、有島武朗しかり、…ゆえに宣教の百年は、また背教の百年でもあった。なぜ、日本のキリスト教はかくも多くの背教者を生み出したか。星野天知氏は集会をやめる時こういつている。「われらは、偉人たちの代表と信じるキリストの聖なるみ心に指導されて、新しい日本に貢献しようとする者である」彼らにとってキリストは偉人の代表ではあっても、罪人をゆるす救世主ではなかった。彼らは自分自身をもてあまし、キリスト無しには生きる方法が見つからない弱い罪人ではなく、キリスト無しでもやってゆける有能な人々であった。それゆえ信仰が邪魔になれば惜しげもなくこれを捨てた。ところが信仰が飾りではなく生命そのものであった者には背教はありえなかった。『神様、罪人の私をおゆるしてください』と、どこまでも自分を低くして主に従うかどうか。これが今もお信仰と背教を分ける分水嶺である。

藤尾正人牧師は、こうも書いています。

●「魂に染み入るような、…全身を耳にして聞くような、聖書の話しを聞きたいなあ。胸が熱くなるような、一度聞くと全部そらんじられるほどの福音の話を聞きたいなあ。聞いた後、周りの人に話さずにはいられないような、喜びの物語を聞きたいなあ。…不幸にも私はかつてその味をしめてしまった。」

藤尾牧師は福音の喜びを知ったのだなあと思います。この喜びを知っている人は、信仰を捨てることはありません。

キリストと最初に出会った時、十字架によって自分でもどうすることもできない自分の深い大きな罪が赦された時の感動、キリストの復活の力強さと神の国と新生を体験した時の、お腹の底から湧いてくるような喜びと感動、それらを忘れることなく、天国の民としての生き方をこれからもしてゆきたいと願います。